

「イメージの魔術師」と呼ばれるマグリットの作品においては事物の形象はきわめて明確に表現され、筆触をほとんど残さない古典的ともいえる描法で丁寧な仕上げがほどこされている。 清和堂明朝 L 28Q 40 詰め

The figure of things is expressed in the work of "magician of the image" and called René Magritte extremely definitely, and polite finish is put in the how to depict that it may be said that I am classic that I do not have touch of the brush for almost.

清和堂明朝 L 16Q

しかし、その画面に表現されているのは、空中に浮かぶ岩、鳥の形に切り抜かれた空、指の生えた靴といった不可思議なイメージであり、それらの絵に付けられた不可思議な題名ともども、絵の前に立つ者を戸惑わせ、考え込ませずにはおかない。

清和堂明朝 L 20Q 20 詰め

「イメージの魔術師」と呼ばれるマグリットは、二十世紀美術のもっとも重要な運動の一つであるシュルレアリスムを代表する画家である。マグリットの作品においては事物の形象はきわめて明確に表現され、筆触をほとんど残さない古典的ともいえる描法で丁寧な仕上げがほどこされている。しかし、その画面に表現されているのは、空中に浮かぶ岩、鳥の形に切り抜かれた空、指の生えた靴といった不可思議なイメージであり、それらの絵に付けられた不可思議な題名ともども、絵の前に立つ者を戸惑わせ、考え込ませずにはおかない。

清和堂明朝 L 12.5Q

「イメージの魔術師」と呼ばれるマグリットの作品においては事物の形象はきわめて明確に表現され、筆触をほとんど残さない古典的ともいえる描法で丁寧な仕上げがほどこされている。

清和堂明朝 L 28 Q 40 詰め

しかし、その画面に表現されているのは、空中に浮かぶ岩、鳥の形に切り抜かれた空、指の生えた靴といった不可思議なイメージであり、それらの絵に付けられた不可思議な題名ともども、絵の前に立つ者を戸惑わせ、考え込ませずにはおかない。

清和堂明朝 L 20 Q 40 詰め

「イメージの魔術師」と呼ばれるマグリットは、二十世紀美術のもっとも重要な運動の一つであるシュルレアリスムを代表する画家である。マグリットの作品においては事物の形象はきわめて明確に表現され、筆触をほとんど残さない古典的ともいえる描法で丁寧な仕上げがほどこされている。しかし、その画面に表現されているのは、空中に浮かぶ岩、鳥の形に切り抜かれた空、指の生えた靴といった不可思議なイメージであり、それらの絵に付けられた不可思議な題名ともども、絵の前に立つ者を戸惑わせ、考え込ませずにはおかない。

清和堂明朝 L 12.5 Q

草枕

夏目漱石

山路を登りながら、こう考えた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来る。

人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒両隣りにちらちらするただの人である。ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくからう。

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容で、東の間の命を、東の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職が出来て、ここに画家という使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊とい。

住みにくき世から、住みにくき煩いを引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが詩である、画である。あるは音楽と彫刻である。こまかに云えば写さないでもよい。ただまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さ

たような峰が聳えている。杉か檜か分からないが根元から頂きまでことごとく蒼黒い中に、山桜が薄赤くだんだんに柵引いて、続き目が確と見えぬくらい靄が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんでて眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去ったか、鋭どき平面をやけに谷の底に埋めている。天辺に一本見えるのは赤松だろう。枝の間の空さえ判然としている。行く手は二丁ほどで切れているが、高い所から赤い毛布が動いて来るのを見ると、登ればあそこへ出るのだろう。路はすこぶる難義だ。

土をならすだけならさほど手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平らにしても石は平らにならぬ。石は切り砕いても、岩は始末がつかぬ。掘崩した土の上に悠然と峙って、吾らのために道を譲る景色はない。向うで聞かぬ上は乗り越すか、廻らなければならぬ。巖のない所でさえ歩るきよくはない。左右が高くて、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿って、その頂点が真中を貫いていると評してもよい。路を行くと云わんより川底を涉ると云う方が適當だ。固より急ぐ旅でないから、ぶらぶらと七曲りへかかる。

たちまち足の下で雲雀の声がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いているか影も形も見えぬ。ただ声だけが明らかに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いている。方幾里の空気が一面に蚤に刺されていたたまれないような気がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の余裕もない。のどかな春の日を鳴き尽くし、鳴きあかし、また鳴き暮らさなければ気が済まないと見える。その上どこまでも登って行く、いつまでも登って行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入っ

ぬとも鏘の音は胸裏に起る。丹青は画架に向って塗抹せんでも五彩の絢爛は自から心眼に映る。ただおのが住む世を、かく観じ得て、霊台方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうららかに収め得れば足る。この故に無声の詩人には一句なく、無色の画家には尺なきも、かく人世を観じ得るの点において、かく煩惱を解脱するの点において、かく清浄界に出入し得るの点において、またこの不同不二の乾坤を建立し得るの点において、我利私慾の羈絆を掃蕩するの点において、——千金の子よりも、万乗の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知った。二十五年にして明暗は表裏のごとく、日のあたる所にはきつと影がさすと悟った。三十の今日はこう思うている。——喜びの深きとき憂いよいよ深く、楽みの大いなるほど苦しみも大きい。これを切り放そうとすると身が持てぬ。片づけようとすれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが殖えれば寝る間も心配だろう。恋はうれしい、嬉しい恋が積もれば、恋をせぬ昔がかえって恋しかる。閣僚の肩は数百万人の足を支えている。背中には重い天下がおぶさっている。うまい物も食わねば惜しい。少し食べば飽き足らぬ。存分食べばあとが不愉快だ。……

余の考がここまで漂流して来た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏み損くなつた。平衡を保つために、すわやと前に飛び出した左足が、仕損じの埋め合せをすると共に、余の腰は具合よく方三尺ほどな岩の上に卸りた。肩にかけた絵の具箱が腋の下から躍り出ただけで、幸いと何の事もなかった。立ち上がる時に向うを見ると、路から左の方にバケツを伏せ

漂うているうちに形は消えてなくなつて、ただ声だけが空の裡に残るのかも知れない。

巖角を鋭どく廻つて、按摩なら真逆様に落つるところを、際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあそこへ落ちるのかと思つた。いいや、あの黄金の原から飛び上がってくるのかと思つた。次には落ちる雲雀と、上る雲雀が十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も、上る時も、また十文字に擦れ違ふときにも元氣よく鳴きつづけるだろうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さえ忘れて正体なくなる。ただ菜の花を遠く望んだときに眼が醒める。雲雀の声を聞いたときに魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全体が鳴くのだ。魂の活動が声にあらわれたものうちで、あれほど元氣のあるものはない。ああ愉快だ。こう思つて、こう愉快になるのが詩である。

たちまちシェレーの雲雀の詩を思い出して、口のうちに覚えなかつた。その二三句のなかにこんながある。

We look before and after
And pine for what is not:
Our sincerest laughter
With some pain is fraught;

特集 1月

著名な句

古池や蛙飛びこむ水の音（ふるいけやかはずとびこむみずのおと）
 名月や池をめぐりて夜もすがら（めいげつやいけをめぐりてよもすがら）

夏草や兵どもが夢の跡（なつくさやつわものどもがゆめのあと）

閑さや岩にしみ入る蟬の声（しずかさやいわにしみいるせみのこえ）

五月雨をあつめて早し最上川（さみだれをあつめてはやしもがみがわ）

【経歴】

伊賀国（現在の三重県伊賀市）で、松尾与左衛門と妻・梅の次男として生まれる。松尾家は農業を業としていたが、松尾の苗字を持つ家柄だった。出生地には、赤坂（現在の伊賀市上野赤坂町）説と柘植（現在の伊賀市柘植）説の2説がある。これは芭蕉の出生前後に松尾家が柘植から赤坂へ引越しをしていて、引越しと芭蕉誕生とどちらが先だったかが不明だからである。

若くして伊賀国上野の侍大将・藤堂新七郎良清の嗣子・主計良忠（俳号は蟬吟）に仕え、2歳年上の良忠とともに北村季吟に師事して俳諧の道に入った。寛文6年（1666年）に良忠が歿するとともに仕官を退く。

寛文12年（1672年）、処女句集『貝おほひ』を上野天満宮

（三重県伊賀市）に奉納。延宝3年（1675年）に江戸に下り、神田上水の工事に携わった後は延宝6年（1678年）に宗匠となり、職業的な俳諧師となった。延宝8年（1680年）に深川に草庵を結ぶ。門人の李下から芭蕉を贈られ、芭蕉の木を一株植えたのが大いに茂ったので「芭蕉庵」と名付けた。その入庵の翌秋、字余り調の芭蕉の句を詠んでいる。

『芭蕉野分して鹽に雨を聞夜哉 芭蕉』

百人一首

益井 隆

天智天皇

1 番歌

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ わが衣手は露にぬれつつ
 春過ぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山
 あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む
 田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ
 奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の 声聞く時ぞ秋は悲しき

●解説―秋の田の、仮小屋の屋根は苫の目が荒いので、私の袖は夜露にぬれている（かりほ＝仮庵。を：み＝が：）。苦＝かやを編んだもの）。秋の田の、仮小屋の屋根は苫の目が荒いので、私の袖は夜露にぬれている（かりほ＝仮庵。を：み＝が：）。苦＝かやを編んだもの）。

鵲の渡せる橋に置く霜の 白きを見れば夜ぞ更けにける
 天の原ふりさけ見れば春日なる 三笠の山に出でし月かも
 わが庵は都の辰巳しかぞ住む 世をうぢ山と人はいふなり
 花の色は移りにけりないたづらに わが身世にふるながめせしまに
 これやこの行くも帰るも別れては 知るも知らぬもあふ坂の関

●解説―鵲が橋をかけ渡すという夜空はすっかり冷えわたり、宮中御橋に霜が白く降り置いているのを見ると、いかにも夜がふけたという感じがする（大伴家持は衛門府のものふの長だった）。空をはるかにふり仰ぐと、春日の三笠山で眺めたのとおなじ月が出ているなあ。

中納言家持

5 番歌

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと 人には告げよ海人の釣船
 天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ 乙女の姿しばしとどめむ
 筑波嶺の峰より落つるみなな川 恋ぞ積もりて淵となりぬる
 陸奥のしのぶもぢずりたれゆえに 乱れそめにしわれならなくに
 君がため春の野に出でて若菜摘む わが衣手に雪は降りつつ

●解説―大海原を、たくさんの島々に向かって漕ぎ出して行つたと、人に伝えておくれ、釣舟の漁師さんよ（嵐が隠岐へ配流された時の歌）。天の風よ、天上への雲の間の通路を吹き閉ざしておくれ、天女の姿をもうしばらく地上にとどめておきたいから（宮中の五節会での舞姫へのアンコール）。

参議 篁

11 番歌

立ち別れいなばの山の峰に生ふる まつとし聞かば今帰り来む
 ちはやぶる神代も聞かず竜田川 からくれなるに水くくるとは
 住の江の岸に寄る波よるさへや 夢の通ひ路人目よくらむ
 難波潟短き蘆のふしの間も 逢はでこの世を過ぐしてよとや
 わびぬれば今はたおなじ難波なる みをつくしても逢はむとぞ思ふ

●解説―あなたと別れて因幡の国へ出発するが、稲羽山に生いしげる松のように、あなたが持つというのを聞けば、すぐにも帰って来よう。不思議なことがあったという神代にも、水の括染なんて聞いたことがない。竜田川が紅葉で真紅に染まっているよ。

中納言行平

16 番歌

科学者とあたま
寺田寅彦

私に親しいある老科学者がある日私に次のようなことを語って聞かせた。「科学者になるには『あたま』がよくなくてはいけない」これは普通世人の口にする一つの命題である。これはある意味ではほんとうだと思われる。しかし、一方でまた「科学者はあたまが悪くなくてはいけない」という命題も、ある意味ではやはりほんとうである。そうしてこの後のほうの命題は、それを指摘し解説する人が比較的少数である。

この一見相反する二つの命題は実は一つのものの互いに対立し共存する二つの半面を表現するものである。この見かけ上のパラドックスは、実は「あたま」という言葉の内容に関する定義の曖昧不鮮明から生まれることはもちろんである。

論理の連鎖のただ一つの輪をも取り失わないように、また混乱の中に部分と全体との関係を見失わないようにするためには、正確でかつ緻密な頭脳を要する。紛糾した可能性の岐路に立ったときに、取るべき道を誤らないためには前途を見透す内察と直観の力を持たなければならない。すなわちこの意味ではたしかに科学者は「あたま」がよくなくてはならないのである。

しかしまた、普通にいわゆる常識的にわかりきったと思われることで、そうして、普通の意味でいわゆるあたまの悪い人にも容易にわかったと思われるような尋常茶飯事の中に、何かしら不可解な疑点を認めそうしてその闡明に苦吟するということが、単なる科学教育者にはとにかく、科学研究に従事する者にはさらにいっそう重要必須なことである。この点で科学者は、普通の頭の悪い人よりも、もっともっと物わりの悪いのみ込みの悪い田舎者であり朴念仁でなければならない。

いわゆる頭のいい人は、言わば足の早い旅人のようなものである。人より先に人のまだ行かない所へ行き着くこともできる代わりに、途中の道ばたあるいはちょっとしたわき道にある肝心なものを見落とす恐れがある。頭の悪い人足ののろい人がずっとあとからおくれて来てわけもなくそのだいたいな宝物を拾って行く場合がある。

頭のいい人は、言わば富士のすそ野まで来て、そこから頂上をながめただけで、それで富士の全体をのみ込んで東京へ引き返すという心配がある。富士はやはり登ってみなければわからない。

頭のいい人は見通しがきくだけに、あらゆる道筋

の前途の難関が見渡される。少なくとも自分でそういう気がする。そのためにややもすると前進する勇気を阻喪しやすい。頭の悪い人は前途に霧がかかっているためにかえって楽観的である。そうして難関に出会っても存外どうにかしてそれを切り抜けて行く。どうにも抜けられない難関というのはきわめてまれだからである。

それで、研学の徒はあまり頭のいい先生にうっかり助言を請うてはいけない。きっと前途に重畳する難関を一つ一つしらみつぶしに枚挙されてそうして自分のせっかく楽しみにしている企図の絶望を宣告されるからである。委細かまわず着手してみると存外指摘された難関は楽に始末がついて、指摘されなかった意外な難点に出会うこともある。

頭のよい人は、あまりに多く頭の力を過信する恐れがある。その結果として、自然がわれわれに表示する現象が自分の頭で考えたことと一致しない場合に、「自然のほうか間違っている」かのように考える恐れがある。まさかそれほどなくても、そういうような傾向になる恐れがある。これでは自然科学は自然の科学でなくなる。一方でまた自分の思ったような結果が出たときに、それが実は思ったとは別の原因のために生じた偶然の結果でありはしないかという可能性を吟味するというだいたいな仕事を忘れる恐れがある。

頭の悪い人は、頭のいい人が考えて、はじめからだめにきまっているような試みを、一生懸命につづけている。やっと、それがだめとわかるころには、しかしたいてい何かしらだめでない他のものの糸口を取り上げている。そうしてそれは、そのはじめからだめな試みをあえてしなかった人には決して手に触れる機会のないような糸口である場合も少なくない。自然は書卓の前で手をつかねて空中に絵を描いている人からは逃げ出して、自然のまん中へ赤裸で飛び込んで来る人へのみその神秘の扉を開いて見せるからである。

頭のいい人には恋ができない。恋は盲目である。科学者になるには自然を恋人としなければならない。自然はやはりその恋人にのみ真心を打ち明けるものである。

科学の歴史はある意味では錯覚と失策の歴史である。偉大なる迂愚者の頭の悪い能率の悪い仕事の歴史である。

頭のいい人は批評家に適するが行為の人にはなりにくい。すべての行為には危険が伴なうからである。けがを恐れる人は大工にはなれない。失敗をこわがる人は科学者にはなれない。科学もやはり頭の悪い命知らずの死骸の山の上に築かれた殿堂であり、血

の川のほとりに咲いた花園である。一身の利害に対して頭がよい人は戦士にはなりにくい。

頭のいい人には他人の仕事のあらが目につきやすい。その結果として自然に他人のする事が愚かに見え従って自分がだれよりも賢いというような錯覚に陥りやすい。そうなる。と自然の結果として自分の向上心にゆるみが出て、やがてその人の進歩が止まってしまう。頭の悪い人には他人の仕事がたいいみんなな立派に見えると同時にまたえらい人の仕事でも自分にもできそうな気がするのでおのずから自分の向上心を刺激されるということもあるのである。

頭のいい人で人の仕事のあらはわかるが自分の仕事のあらは見えないという程度の人がある。そういう人は人の仕事をくさしながらも自分で何かしら仕事をして、そうして学界にいくぶんの貢献をする。しかしもういっそう頭がよくて、自分の仕事のあらも見えるという人がある。そういう人になると、どこまで研究しても結末が見つからない。それで結局研究の結果をまとめないで終わる。すなわち何もしなかったのと、実証的な見地からは同等になる。そういう人はなんでもわかっているが、ただ「人間は過誤の動物である」という事実だけを忘却しているのである。一方でまた、大小方円の見さかいかもつかないほどに頭が悪いおかげで大胆な実験をし大胆な理論を公にしその結果として百の間違いの内に一つ二つの真を見つけて出して学界に何かしかな貢献をしながらまた誤って大家の名を博する事さえある。しかし科学の世界ではすべての間違いは泡沫のように消えて真なもののみが生き残る。それで何もしない人よりは何かした人のほうが科学に貢献するわけである。

頭のいい学者はまた、何か思いついた仕事があった場合にも、その仕事の結果の価値という点から見るとせっかく骨を折っても結局たいした重要なものになりそうもないという見込みをつけて着手しないで終わる場合が多い。しかし頭の悪い学者はそんな見込みが立たないために、人からはきわめてつまらないと思われる事でもなんでもがむしやりに仕事に取りついてわき目もふらずに進行して行く。そうしているうちに、初めには予期しなかったような重大な結果にぶつかる機会も決して少なくはない。この場合にも頭のいい人は人間の頭の力を買いかぶって天然の無制限な興行きを忘却するのである。科学的研究の結果の価値はそれが現われるまではたいていだれにもわからない。また、結果が出た時にはだれも認めなかった価値が十年百年の後に初めて認められることも珍しくはない。

頭がよくて、そうして、自分を頭がいいと思利口だと思う人は先生にはなれても科学者にはなれな

い。人間の頭の力の限界を自覚して大自然の前に愚かな赤裸の自分を投げ出し、そうしてただ大自然の直接の教えにのみ傾聴する覚悟があって、初めて科学者にはなれるのである。しかしそれだけでは科学者にはなれない事ももちろんである。やはり観察と分析と推理の正確周到を必要とするのは言うまでもないことである。

つまり、頭が悪いと同時に頭がよくなくてはならないのである。

この事実に対する認識の不足が、科学の正常なる進歩を阻害する場合がしばしばある。これは科学にたずさわるほどの人々の慎重な省察を要することと思われる。

最後にもう一つ、頭のいい、ことに年少気鋭の科学者が科学者としては立派な科学者でも、時として陥る一つの錯覚がある。それは、科学が人間の知恵のすべてであるもののように考えることである。科学は孔子のいわゆる「格物」の学であって「致知」の一部に過ぎない。しかるに現在の科学の国土はまだウバニシヤドや老子やソクラテスの世界との通路を一筋でももっていない。芭蕉や広重の世界にも手を出す手がかりをもっていない。そういう別の世界の存在はしかし人間の事実である。理屈ではない。そういう事実を無視して、科学ばかりが学のように思い誤り思いあがるのは、その人が科学者であるには妨げないとしても、認識の人であるためには少なからざる障害となるであろう。これもわかりきったことのものであってしばしば忘れがちなことであり、そうして忘れてならないことの一つであろうと思われる。

この老科学者の世迷い言を読んで不快に感ずる人はきつとらやむべきすぐれた頭のいい学者であろう。またこれを読んで会心の笑みをもらす人は、またきつとらやむべく頭の悪い立派な科学者であろう。これを読んで何事も考えない人はおそらく科学の世界に縁のない科学教育者か科学商人の類であろうと思われる。

(昭和八年十月、鉄塔)

清和堂明朝体 L
サイズ 13Q 字送り 8H

さまよえる猶太人
芥川龍之介

基督教国にはどこにでも、「さまよえる猶太人」の伝説が残っている。伊太利でも、仏蘭西でも、英吉利でも、独逸でも、奥太利でも、西班牙でも、この口碑が伝わっていない国は、ほとんど一つもない。従つて、古来これを題材にした、芸術上の作品も、沢山ある。グスタヴ・ドオレの画は勿論、ユウジアン・スウもドクタア・クロロイも、これを小説にした。モンク・ルイズのあの名高い小説の中にも、ルシファアや「血をしたたらす尼」と共に「さまよえる猶太人」が出て来たように記憶する。最近では、フィオナ・マクレオドと称したウイリアム・シャアブが、これを材料にして、何とか云う短篇を書いた。

では「さまよえる猶太人」とは何かと云うと、これはイエス・クリストの呪を負つて、最後の審判の来る日を待ちながら、永久に漂浪を続けている猶太人の事である。名は記録によつて一定しない。あるいはカルタフィルストと云い、あるいはアハスフェルスと云い、あるいはブタデウスと云い、あるいはまたイサク・ラクエデムと云つている。その上、職業もやはり、記録によつてちがう。イエルサ

再び英吉利に入り、ケムブリッジやオックスフォードの教授たちの質疑に答えた後、丁抹から瑞典へ行つて、ついに踪跡がわからなくなつてしまつた。爾来、今日まで彼の消息は、杳としてわからない。

「さまよえる猶太人」とは如何なるものか、彼は過去において、如何なる歴史を持つてゐるか、こう云う点に関しては、如上で、その大略を明にし得た事と思う。が、それを伝えるのみが、決して自分の目的ではない。自分は、この伝説的な人物に関して、嘗て自分が懐いていた二つの疑問を挙げ、その疑問が先頃偶然自分の手で発見された古文書によつて、二つながら解決された事を公表したのである。そうして、その古文書の内容をも併せて、ここに公表したのである。まず、第一に自分の懐いてゐた、二つの疑問とは何であるか。――

第一の疑問は、全く事実上の問題である。「さまよえる猶太人」は、ほとんどあらゆる基督教国に、姿を現した。それなら、彼は日本にも渡来した事がありはしないか。現代の日本は暫く措いても、十四世紀の後半において、日本の西南部は、大抵天主教を奉じていた。デルブロオのビプリオテエク・オリアンタアルを見ると、「さまよえる猶太人」は、十六世紀の初期に當つて、フアディラの率いるアラビアの騎兵が、エルヴァンの市を陥れ

レムにあるサンヘドリムの門番だつたと云うものもあれば、いやピラトの下役だつたと云うものもある。中にはまた、靴屋だと云つてゐるものもあつた。が、呪を負うようになった原因については、大体どの記録も変りはない。彼は、ゴルゴタへひかれて行くクリストが、彼の家の戸口に立止つて、暫く息を入れようとした時、無情にも罵詈を浴せかけた上で、散々打擲を加えさせた。その時負うたのが、「行けと云うなら、行かぬでもないが、その代り、その方はわしの帰るまで、待つて居れよ」と云う呪である。彼はその後、パウロが洗礼を受けたのと同じアナニアスの洗礼を受けて、ヨセフと云う名を貰つた。が、一度負つた呪は、世界滅却の日が来るまで、解かれぬ。現に彼が、千七百二十一年六月二十二日、ムウニツヒの市に現れた事は、ホルマイエルのタツシエン・ブウフの中に書いてある。――

これは近頃の事であるが、遠く文献を溯つても、彼に関する記録は、随所に発見される。その中で、最も古いのは、恐らくマシウ・パリスの編纂したセント・アルバンスの修道院の年代記に出ている記事である。これによると、大アルメニアの大僧正が、セント・アルバンスを訪れた時に、通訳の騎士が大僧正はアルメニアで屢々「さまよえる猶太人」と食卓を共にした事があると云つたそうであ

た時に、その陣中に現れて、Allah akubarの祈禱を、フアディラと共にしたと云う事が書いてある。すでに彼は、「東方」にさへ、その足跡を止めている。大名と呼ばれた封建時代の貴族たちが、黄金の十字架を胸に懸けて、パアテル・ノステルを口にした日本を、――貴族の夫人たちが、珊瑚の念珠を爪繰つて、毘留善麻利耶の前に跪いた日本を、その彼が訪れなかつたと云う筈はない。更に平凡な云い方をすれば、当時の日本人にも、すでに彼に関する伝説が、「さまよる」や羅面琴と同じように、輸入されていしなかつたか――と、こう自分は疑つたのである。

第二の疑問は、第一の疑問に比べると、いささかその趣を異にしている。「さまよえる猶太人」は、イエス・クリストに非礼を行つたために、永久に地上をさまよわなければならぬ運命を背負わせられた。が、クリストが十字架にかけられた時に、彼を宥めたものは、独りこの猶太人ばかりではない。あるものは、彼に荆棘の冠を頂かせた。あるものは、彼に紫の衣を纏わせた。またあるものはその十字架の上に、I・N・R・Iの札をうちつけた。石を投げ、唾を吐きかけたものに至つては、恐らく数えきれないほど多かつたのに違いない。それが何故、彼ひとりクリストの呪を負つたのである。あるいはこの「何故」には、どう云う解釈が与えられているのであ

る。次いで、フランドルの歴史家、フィリップ・ムスクが千二百四十二年に書いた、韻文の年代記の中にも、同じような記事が見えてゐる。だから十三世紀以前には、少くとも人の視聽を聳たしめる程度に、彼は歐羅巴の地をさまよわなかつたらしい。所が、千五百五十年になると、ボヘミアで、コトと云う機織りが、六十年以前にその祖父の埋めた財宝を彼の助けを借りて、発掘する事が出来た。そればかりではない。千五百四十七年には、ジュレスウイツヒの僧正パウル・フォン・アイツェンと云う男が、ハムブルグの教会で彼が祈禱をしてゐるのに出遇つた。それ以来、十八世紀の初期に至るまで、彼が南北両欧に亘つて、姿を現したと云う記録は、甚だ多い。最も明白な場合のみを挙げて見ても、千五百七十五年には、マドリッドに現れ、千五百九十九年には、ウインに現れ、千六百一年にはリウベック、レヴェル、クラカウの三ヶ所に現れた。ルドルフ・ポトレウスによれば、千六百四年頃には、パリに現れた事もあるらしい。それから、ナウムブルグやブラツセルを経て、ライプツィツヒを訪れ、千六百五十八年には、スタンフォードのサムエル・ウオリスと云う肺病やみの男に、赤サルビアの葉を二枚に、羊蹄の葉を一枚、麦酒にまぜて飲むと、健康を恢復すると云う秘法を教えてやつたそうである。次いで、前に云つたムウニツヒを過ぎて、

らう。――これが、自分の第二の疑問であつた。

自分は、数年来この二つの疑問に対して、何等の手がかりをも得ず、空しく東西の古文書を渉獵していた。が「さまよえる猶太人」を取扱つた文献の数は、非常に多い。自分がそれをことごとく読破すると云う事は、少くとも日本に在る限り、全く不可能な事である。そこで、自分はとうとう、この疑問も結局答えられる事がないのかと云う氣になつた。所が丁度そう云う絶望に陥りかかつた去年の秋の事である。自分は最後の試みとして、両肥及び平戸天草の諸島を遍歴して、古文書の蒐集に従事した結果、偶然手に入れた文禄年間のMSB中から、ついに「さまよえる猶太人」に関する伝説を発見する事が出来た。その古文書の鑑定その他に関しては、今ここに叙説してゐる暇がない。ただそれは、当時の天主教徒の一人が伝聞した所を、そのまま当時の口語で書き留めて置いた簡単な覚え書だと言ふ事を書いてさへ置けば十分である。

この覚え書によると、「さまよえる猶太人」は、平戸から九州の本土へ渡る船の中で、フランシス・ザヴィエルと邂逅した。その時、ザヴィエルは、「シメオン伊留満一人を御伴に召され」ていたが、そのシメオンの口から、当時の容子が信徒の間へ伝えられ、それがまた次第に諸方へひろまつて、ついには何十年

か後に、この記録の筆者の耳へもはいるような事になったのである。もし筆者の言をそのまま信用すれば「ふらんしす上人さまよえるゆだやびと問答の事」は、当時の天主教徒間に有名な物語の一つとして、しばしば説教の材料にもなつたらしい。自分は、今この覚え書の内容を大体に亘つて、紹介すると共に、二三、原文を引用して、上記の疑問の氷解した喜びを、読者とひとしく味いたいと思う。

第一に、記録はその船が「土産の果物くさぐさを積」んでいた事を語っている。だから季節は恐らく秋であろう。これは、後段に、無花果云々の記事が見えるのに徴しても、明である。それから乗合はほかにはなかつたらしい。時刻は、丁度昼であつた。――筆者は本文へはいる前に、これだけの事を書いている。従つてもし読者が当時の状況を彷彿しようと思ふなら、記録に残っている、これだけの箇条から、魚の鱗のように眩く日の光を照り返している海面と、船に積んだ無花果や柘榴の実と、そうしてその中に坐りながら、熱心に話し合っている三人の紅毛人とを、読者自身の想像に描いて見るよりはかはない。何故と云えば、それらを活々と描写する事は、単なる一学究たる自分にとつて、到底不可能な事だからである。

が、もし読者がそれに多少の困難を感じる判を受けられるとすぐに、一家のものどもを戸口へ呼び集めて、勿体なくも、御主の御悩みを、笑い興しながら、見物したものでござる。」

記録の語る所によると、クリストは、「物に狂うたような群集の中を」、パリサイの徒と祭司とに守られながら、十字架を背にした百姓の後について、よろめき、歩いて来た。肩には、紫の衣がかかつている。額には荆棘の冠がのつている。そうしてまた、手や足には、鞭の痕や切り創が、薔薇の花のように赤く残っている。が、眼だけは、ふだんと少しも変りがない。「日頃のように青く澄んだ御眼」は、悲しみも悦びも超越した、不思議な表情を湛えている。――これは、「ナサレの木匠の子」の教を信じない、ヨセフの心にさえ異常な印象を与えた。彼の言葉を借りれば、「それがしも、その頃やはり御主の眼を見る度に、何となくつかしい気が起つたものでござる。大方死んだ兄と、よう似た眼をしていられたせいでもござらう。」

その中にクリストは、埃と汗とにまみれながら、折から通りかかった彼の戸口に足を止めて、暫く息を休めようとした。そこには、鞞皮の帯をしめて、わざと爪を長くしたパリサイの徒もいた事であろうし、髪に青い粉をつけて、ナルドの油の匂をさせた娼婦たちもいた事であろう。あるいはまた、羅馬の兵卒

とすれば、ベックがその著「ヒストリイ・オブ・スタンフォード」の中で書いている「さまよえる猶太人」の服装を、大体ここに紹介するのも、読者の想像を助ける上において、あるいは幾分の効果があるかも知れない。ベックはこう云つている。「彼の上衣は紫である。そうして腰まで、ボタンがかかつている。ズボンも同じ色で、やはり見た所古くはないらしい。靴下はまっ白であるが、リンネルか、毛織りか、見当がつかなかった。それから髻も髪も、両方とも白い。手には白い杖を持つていた。」――これは、前に書いた肺病や目のサムエル・ウォリスが、親しく目撃した所を、ベックが記録して置いたのである。だから、フランシス・ザヴィエルが遇つた時も、彼は恐らくこれに類した服装をしていたのに違いない。

そこで、それがどうして、「さまよえる猶太人」だとわかつたかと云うと、「上人の祈祷された時、その和郎も恭しく祈祷した」ので、フランシスの方から話をしかけたのだそうである。所が、話して見ると、どうも普通の人間ではない。話すことと云い、話し振りと云い、その頃東洋へ浮浪して来た冒険家や旅行者とは、自ら容子がちがつている。「天竺南蛮の今昔を、掌にても指すように」指したので、「シメオン伊留満はもとより、上人御自身さえ舌を捲かれたそうでござる。」そ

たちの持つている楯が、右からも左からも眩く暑い日の光を照りかえしていたかも知れない。が、記録にはただ、「多くの人々」と書いてある。そうして、ヨセフは、その「多くの人々の手前、祭司たちへの忠義ぶりが見せとうござつたによつて、」クリストの足を止めたのを見ると、片手に子供を抱きながら片手に「人の子」の肩を捕えて、ことさらに荒々しくこずきまわした。――「やがては、ゆるりと磔柱にかつて、休まるる体じやなど悪口し、あまつさえ手をあげて、打擲さえたものでござる。」

すると、クリストは、静に頭をあげて、叱るようにヨセフを見た。彼が死んだ兄に似ていると思つた眼で、厳にじつと見たのである。「行けと云うなら、行かぬでもないが、その代り、その方はわしの帰るまで、待つて居れよ。」――クリストの眼を見ると共に、彼はこう云う語が、熱風よりもはげしく、利那に彼の心へ焼けつくような気もちがした。クリストが、実際こう云つたかどうか、それは彼自身にも、はっきりわからない。が、ヨセフは、「この呪が心耳にとどまつて、いても立つても居られぬような氣になつたのであろう。あげた手が自ら垂れ、心頭にあつた憎しみが自ら消えると、彼は、子供を抱いたまま、思はず往来に跪いて、爪を剥がしているクリストの足に、恐る恐る唇をふれようとした。が、

こで、「そなたは何処のものじゃと御訊ねあつたれば、一所不住のゆだやびと」と答えた。が、上人も始めは多少、この男の真偽を疑いかけていたのであろう。「当来の波羅韋僧にかけても、誓い申すべや。」と云つたら、相手が「誓い申すとの事故、それより上人も打ちとけて、種々問答せられたげじや。」と書いてあるが、その問答を見ると、最初の部分は、ただ昔あつた事実を尋ねただけで、宗教学上の問題には、ほとんど一つも触れていない。

それがウルスラ上人と一万一千の童貞少女が、「奉公の死」を遂げた話や、パトリック上人の浄罪界の話を経て、次第に今日の使徒行伝中の話となり、進んでは、ついに御主耶穌基督が、ゴルゴダで十字架を負つた時の話になつた。丁度この話へ移る前に、上人が積荷の無花果を水夫に分けて貰つて、「さまよえる猶太人」と一しよに、食つたと云う記事がある。前に季節の事に言及した時に引いたから、ここに書いて置くが、勿論大した意味がある訳ではない。――さて、その問答を見ると、大体下のような具合である。

上人「御主御受難の砌は、エルサレムにいられたか。」

「さまよえる猶太人」「如何にも、眼のあたり御受難の御有様を拝しました。元來それがしは、よせふと申して、えるされむに住む靴匠でござつたが、当日は御主がびらと殿の裁

もう遅い。クリストは、兵卒たちに追いつて立てられて、すでに五六歩彼の戸口を離れている。ヨセフは、茫然として、ややともすると群集にまぎれようとする御主の紫の衣を見送つた。そうして、それと共に、云いようのない後悔の念が、心の底から動いて来るのを意識した。しかし、誰一人彼に同情してくれるものはない。彼の妻や子でさえも、彼のこの所作を、やはり荆棘の冠をかぶらせるのと同様、クリストに対する嘲弄だと解釈した。そして往来の人々が、いよいよ面白そうに笑い興じたのは、無理もない話である。――石をも焦がすようなエルサレムの日の光の中に、濛々と立騰る砂塵をあげせて、ヨセフは眼に涙を浮かべながら、腕の子供をいつか妻に抱きとられてしまつたのも忘れて、いつまでも跪いたまま、動かなかった。……「されば恐らく、えるされむは広しと云え、御主を辱めた罪を知っているものは、それがしひとりでござらう。罪を知ればこそ、呪もかかつてござる。罪を罪とも思わぬものに、天の罰が下ろうようはござらぬ。云わば、御主を磔柱にかけた罪は、それがしひとりが負うたようなものでござる。但し罰をうければこそ、贖いもあると云う次第ゆえ、やがて御主の救拔を蒙るのも、それがしひとりにきわまりました。罪を罪と知るものには、総じて罰と贖いとが、ひとつに天から下るものでござる。」――

